

F. ナイチンゲールにおける看護技術論の 形成過程に関する研究

山 本 利 江 (千葉大学看護学部)

本研究の目的は F. ナイチンゲールの看護技術論の形成過程を明らかにすることである。分析対象は初めての看護実践の見学報告書『カイゼルスウェルト学園によせて』と、彼女自身の実践報告書『病院監督から貴婦人委員会への季刊報告』である。記述から F. ナイチンゲールの認識を辿り、看護技術に関する像とその経時的变化を分析し、その後の実践活動について考察した。その結果、見学体験では看護についての一般的な像の形成は認められなかった。しかし F. ナイチンゲールは、人間は完全なる神の定める法則を求め実践する存在と捉え、見学した看護実践の意味を探り人間を対象とする技術に共通する表象像を描いた。また直接体験では、看護についての一般的な像を形成し実践を展開した。則ち看護の一般的な像に基づき看護技術の表象像を捉え、次の実践に適用したのである。このことから、看護技術の立体像の形成とそれを意識的に実践に適用し、看護技術論の形成が認められた。この段階の看護技術論がスクタリでの実践を導き、実践家として飛躍的に発展させ、この体験が『看護覚え書』に示された看護一般の認識を形成させた。

結論：抽象像に導かれた実践が技術の立体像の形成を促し、この立体像が看護技術の立体像を形成すると同時に、その像を次の実践に適用させることを促した。この認識と実践の連続性のうちに、F. ナイチンゲールの看護技術論を基礎とする看護者としての発展の構造が明らかとなった。

KEY WORDS : nursing technology, nursing paradigm, Florence Nightingale

1. はじめに

筆者はこれまでの看護教育実践を経て、個々の看護基本技術は看護技術論を意識しなくても教えられるが、看護学を基盤とする看護技術教育を行うには、看護技術論は不可欠である事に気づかされた。なぜなら、看護技術とは、個々の看護技術がその時々の看護者の認識である看護観とその表現の過程でありながら、それら看護技術はすべて対象への看護を実現するための実践活動として統合されていくという構造をもつ。従って看護専門職を目指す看護学生には、この看護技術の構造に基づき、自己の看護技術を評価する看護観の形成が求められるからである。このことを薄井は「看護技術を“看護するために”という論理、すなわち〔看護観の表現技術＝科学としての看護論の適用である技術〕として位置づけられる方法論を私たちはもたねばならないのである」¹⁾と述べ、看護技術論の形成を促した。しかし看護技術についての概念規定はあるものの、看護技術についての看護者の認識を、現象の記述から構造を浮き彫りにし、その本質的段階の認識²⁾として位置づけられる看護技術論の論述はみあたらなかった。そこで看護技術論を追究する

には、看護実践から、前述した看護技術の構造を浮き彫りにし、看護者がその構造をどのように認識しているかを、その看護者の看護観との関係をふまえて論述する段階であると考えた。そのためには、看護実践と看護者の認識を、つながりをもって再現可能な材料が必要である。そこで膨大な著述を残し、その著述の中で看護一般を明らかにした F. ナイチンゲールを研究対象として選択した。

2. 研究目的

本研究は、看護技術論の史的発達過程を究明する端緒として、F. ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程を明らかにすることを目的とする。

3. 理論的枠組みと用語の概念規定

1) 認識論と技術論の枠組み

看護技術論の形成過程を調べるには、看護技術が存在する事象をとりあげ、その事象における看護技術の過程的構造を論じ、看護技術としての一般性を明らかにして看護学に位置づけることが必要である。この事象から技術の存在を認識し、科学に位置づけていく思考過程を現すために、三浦つとむの科学的認識論と庄司和晃の三段階連関理論および、武谷三男の技術論を理論的前提とし

た。論述にあたっては、この理論的前提に基づき、事象の本質的・一般的・理性的・概念的な抽象的段階、表象的・特殊的・比喩的・諺的な表象的段階、具象的・個別的・感性的な現象的段階を区別してとらえ、事象をこれら三段階のつながりをふまえた立体的構造として把握することに留意した。この他の用語については、次のように定義した。

- ・論理：事象にひそむ客観的法則性
- ・技術：人間実践における客観的法則性の意識的適用
- ・立体像：事象の立体的構造を反映し形成された像

2) 看護学の枠組み

看護技術を看護実践現象からとらえると、看護技術の出発は看護者が、対象に看護技術を必要とする事実を認めることから始まる。実施にあたって対象の反応を反映しつつ、行おうとする技術を思い浮かべ、その表現方法を決定し、自己の身体をととして現実に表現し、表現のあとに対象に起きた変化から、対象にとっての看護になっていたかどうかを評価する。本研究では、以上の過程的構造をふまえた看護技術の概念規定を採用した。またF. ナイチンゲールの表現から事象をすくいあげ、そのなかから看護技術の存在を示すためには、論述の根拠となる看護一般論が必要である。本研究では薄井の『科学的看護論』を看護一般論として採用した。なお看護技術論については、以下のように操作的に定義した。

- ・看護（看護一般）：生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえる
- ・看護の論理：事象を看護一般に照らすことによって抽出される客観的法則性
- ・看護技術：看護観とその表現
- ・看護技術論：看護一般の実現を一般論に据えて、看護技術の立体的構造を反映し形成された像、すなわち看護技術の立体像

4. 対象および方法

1) 分析対象および選定根拠

研究対象はF. ナイチンゲールの看護実践およびその認識である。

分析対象は、現時点で可能な限り近似的にF. ナイチンゲールの看護実践および認識を把握するために、彼女自身の著述である一次文献が適当である。また、看護技術論の形成過程を明らかにするためには、看護技術に対する認識の質的变化を示す必要がある。これらの選定根拠により、以下の二点を分析対象として選択した。

『カイゼルスウェルト学園によせて（1851）』カイゼルスウェルト学園の施設見学後、その施設で行われてい

る実践をととして、看護について初めて述べた著述である。彼女自身は患者への看護を体験していない。

『病院監督から貴婦人委員会への季刊報告（1853～1854）』当時ロンドンのハーレイ街にあった淑女病院の運営を任せられ、経営主体である貴婦人委員会に3カ月毎に提出した報告書で、彼女がこの施設で行った看護実践に関する著述である。看護職として初めて患者に直接関わった体験を述べたものとして位置づけられる。

2) 研究方法

(1) F. ナイチンゲールの実践における論理構造の把握

『カイゼルスウェルト学園によせて』と『病院監督から貴婦人委員会への季刊報告』をそれぞれ精読し、看護技術と看護技術の概念を導く、すべての事象に関係する記述をKey sentencesとして選択する。それぞれのKey sentencesをもとに、まとまりごとの論理構造図を作成する。この論理構造図を手がかりに、性質の異なる看護技術を内包する事象を選び出す。

(2) F. ナイチンゲールの実践における看護技術の立体像の分析

各事象ごとに①F. ナイチンゲールの事象に対する認識を示す表現を記述する。②①から、その時形成されていた像と、その像を形成させた体験を観念的に追体験する。そして、看護一般論に基づき事象の構造と看護の論理および、その認識を形成させた一般論との連関を看護技術の立体像として論述する。

(3) F. ナイチンゲールの看護技術に関する認識の特徴

看護技術の構造、つまり看護観とその表現という観点から、各事象に対するF. ナイチンゲールの認識の特徴を論述する。

(4) F. ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程の分析

看護技術に対する認識の経時的変化から、その認識の形成過程の特徴を論述し、この認識の形成過程に影響を与えたと推測されるF. ナイチンゲールの体験を、諸文献に基づいて考察し、F. ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程を明らかにする。

5. 結 果

(1) 看護技術と看護技術の概念を導く、全ての事象に関係するKey sentencesは、『カイゼルスウェルト学園によせて』から53、『病院監督から貴婦人委員会への季刊報告』第1回季刊報告書から35、第2回季刊報告書から44、第3回季刊報告書から25、第4回季刊報告書から

15, 得られた。次に, 得られた Key sentences から計 5 枚の論理構造図を作成した。本稿では紙面の都合上省略する。

作成した論理構造図から性質の異なる看護技術を内包する事象として, 以下の10事象を選び出した。

『カイゼルスウェルト学園によせて』

「夜間の看護」「子供たちへの関わり」「訪問看護」「フリードナー牧師の指導」「カイゼルスウェルト学園にいる人々の態度」

『病院監督から貴婦人委員会への季刊報告』

「病院運営」「入院患者の概要」「病院監督就任半年後の入院患者についての結論」「患者にとっての医療の意味」「身体と心と生活を同時に支える看護」

(2) 各事象ごとに① F. ナイチンゲールの事象に対する認識を示す表現を記述する。②①から, 看護一般論に基づき事象の構造と看護の論理および, その認識を形成させた一般論との連関を, 看護技術の立体像として論述した。結果の一部を以下に示す。

「夜間の看護」

①事象に対する認識を示す表現

夜間の看護は勤務のシフトが組まれ, シスターは無理なく勤務に臨める体制になっている。1時間毎に当直のシスターがベッドサイドを巡回する。こうして危険ではない患者の細々した要求や訴えに, 病棟シスターを起こすことなく応えられる。

②看護技術の立体像

この記述の看護の対象者は危険ではない患者とあり, 夜間つききりの観察や処置は必要としない状態といえる。ところで人間にとって夜間は休息の時間であり, 休息の妨げを最小限にすることが回復過程の促進につながる。しかし人間は夜間であっても, 排泄や飲水の欲求が生じれば, それを満たし, 体位や寝具を整えるといったことを行っている。これらを患者は自分で行なおうとしても, 病気が身体を消耗させ生命力が小さくなっているため, 休息している状態から, 起きて行動しようとすることは, 健康人とは比較にならないような, さらなる生命力の消耗を引き起こすことになる。またこのような患者が, 世話を受けようとする時には, 眠っている人を起こし煩わせることになるので, 人を呼ぶに値する用事かと考え, 我慢したり, 人を呼ぶ場合でも, 恐縮して世話をお願いすることになる。そのような患者のベッドサイドに, 1時間ごとの巡回で定期的に当直が訪れるということは, 世話を受けて要求が満たされるというニーズの充足と, 当直シスターが来てくれるとわかっていること

がもたらす安心感を与えられていることを意味する。つまり, 夜間の患者の生活調整は, 看護一般に照らした時に, 患者の生命力の消耗を少なくしている実践ととらえられ, この勤務のシフトとそこで行われている看護の実際に, 生活時間帯の特殊性をふまえた関わりを実現するという看護の論理を認めることができる。

以上の分析を他の 9 事象についても同様に行った。(詳細は博士学位論文『F. ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程に関する研究』10-24参照)

(3) F. ナイチンゲールの看護技術に関する認識の特徴

看護技術の構造つまり看護観とその表現という観点から, 各事象に対する F. ナイチンゲールの認識の特徴を以下に述べる。

「夜間の看護」では, 看護者は当直シスターであり, F. ナイチンゲールはその看護を観察する立場にある。F. ナイチンゲールの認識には, 患者は危険な状態ではないが, 夜間にこまごました要求や訴えがあるという点で他人の援助を必要とする対象として存在する。看護者が要求や訴えに応え, 患者と看護者との間の援助関係が成立している。これを夜間の看護と呼んでいる事から, 彼女は患者と看護者の間の援助関係を看護と認識していたことがわかる。また看護者である当直シスターの行為は患者のニーズを満たす行為として肯定している。しかし, 対象である患者のニーズを「細々した要求や訴え」と述べ, ニーズが発生する対象の構造や看護者の行為の意味については言及していない。以上より, F. ナイチンゲールのこの事象における看護観とその表現に対する認識は, 対象のニーズの存在と, ニーズを満たすそうとする看護者の表現をとらえていることから, 患者看護者関係の成立, つまり看護過程が反映していることととらえることができる。しかし対象や看護過程の構造には言及していない。そこで, この事象を看護一般論に照らすと, 夜間という特殊な生活時間帯における生命力の消耗を発見する看護の論理を認めることはできるが, F. ナイチンゲールはその現象像に注目していることが明らかとなった。

「子供たちへの関わり」では, シスターと子供達との関わりをとりあげており, この事象においても F. ナイチンゲールは観察者の立場にある。彼女の認識には, 子供のほとんどは腺病質だが, 庭で遊ぶのが好きで, 書物を読んでもらい, 教化を受け成長していく対象として存在する。一方, 関わるシスターの本の読み方に注目し, 読み聞かせるのではなく, 語り聞かせ, 子供の心に入り

教化しようとして努力し、それが子供の認識の形成・発展を促しているとして肯定する。つまり、虚弱体質という子供の身体の特異性をとらえつつ、その発達段階にふさわしい欲求と成長課題を、対象の構造としてとらえている。そして関わる人間の、表現とその時の思いを読みとり、表現の善し悪しの判断を、対象である子供の構造に即した関わりとして評価していたことがわかる。以上より、F. ナイチンゲールのこの事象における看護観とその表現に対する認識は、対象である子供の構造と、対象の構造を反映している看護者の認識とその表現の構造を、二重構造として反映していたととらえることができる。これらを看護一般論に照らした時に、子供の生命力の拡大につながるものを発見し、子供の認識の形成・発展を促すという看護の論理を、F. ナイチンゲールの認識のうちに認めることができた。すなわち看護の間接的立場から現象を観察し、構造をとらえていたF. ナイチンゲールの認識から、看護一般論につながる看護の論理を見いだせることが明らかとなった。つまりF. ナイチンゲールの認識に看護についての一般的な像の形成は認められないが、この事象からは人間の成長一般の像を抽象的段階に据えて、現象像と表象像を描いていたということ、すなわち事象の立体的な構造を反映した立体像を形成していたことを認めることができた。

このほかの事象から、彼女がとらえた対象は、患者を含め、学園に居住する人々すべてであり、関わる人は前述した人々以外に、中心的な存在であるフリードナー牧師、看護婦になろうとする女性、監督シスター、教区ディーコネスであった。F. ナイチンゲールは見学体験をとおして、すべての人々に共通した道徳的雰囲気を感じとり、その精神を導いているのは学園を創設したフリードナー牧師の生活態度や指導過程にあると注目した。F. ナイチンゲールがとらえた牧師の認識とその表現の特徴は、相手の認識に対象像がどのように描かれているのかを浮き彫りにしようと相手に問いかけ、そこに牧師自身が描く対象像を重ねてみせ、そこに潜む事象の論理を抜き出す思考過程を意識的に表現することととらえられた。ここに精神の交流をはかるという論理を認めることができる。

一方、F. ナイチンゲール自身は対象認識とその表現の普遍的あり方を、以下のように考えていることを、著述³⁾の中で述べている。自然界には神の定める法則があり、それは神の御意志の現れで、この神の御意志を追求しようとするのが、結果として人間に神の定めた法則を発見させることになる。F. ナイチンゲールの認識には、最も抽象的な段階に完全なる神が位置づけられ、彼

女自身も含めて不完全な人間が、対象を認識するには、観念的追体験によって完全なる神の御意志、つまり法則を求めて実践することであると信じていた。F. ナイチンゲールはフリードナー牧師の実践が、自分と同じ世界観に基づく理想的世界の実現として認識していた。この世界観は観念論であり、事物の存在に観念を排除し法則性を追究しようとする科学観に対立する。しかし、F. ナイチンゲールの世界観から神を棚上げすれば、自然界の法則を追究しようとするF. ナイチンゲールの姿勢は、科学する姿勢と一致すると認めることができた。

次に、病院監督をした時の報告書から得られた事象について概括する。就任直後は、生活・病床環境の創出と維持のための人的・経済的管理に腐心した。報告書から、この実践において、F. ナイチンゲールには当初から、患者個々の生活と、生活の場としての病院を対象に、安全・安楽・清潔・補修・管理と、それを実現するための経済・労働の連関が像として形成されていた。貴婦人達にこの直接的な実践活動について報告することをとおして、実践から引き出されてくる看護の論理をたどらせ、F. ナイチンゲール自身の要求を実現していく過程そのものが、自己の看護観を表現していく過程としてとらえられた。以上より生活環境の整備とその継続的管理という看護の論理を認めることができた。

1年間の患者報告の推移から、F. ナイチンゲールが初期には一般的な世話から始め、対象の個別的な言動を観察し、病院や看護がその患者にどのような変化をもたらしているのかを分析して、実践の方向性を定め実践していることが明らかとなった。この対象認識とその表現の過程は、看護過程展開の技術そのものである。この実践の結果、医療処置が必要な患者が最少期間入院し、退院後の生活の様子から、患者に生きようとする積極的な姿勢が根づいていることが認められた。ということは、F. ナイチンゲールの描く病院や看護の役割が実現していることであり、患者への看護においても、自身の認識を表現しえたことが明らかとなった。

各事象を看護一般論に照らし、得られた看護の論理は、特殊な生活過程をみてとり患者にはたらきかける、身体と心と生活を同時に支える看護、患者の関心を生きることの実現に向ける、患者にとっての医療と看護の役割の実現、であった。これら全ての事象においてF. ナイチンゲールは、患者、看護者、医療者、患者を取り巻く人々、病院、病院で働く人々、病院の経営主体、患者が生活する社会を対象として、看護を実現することに照らして、それぞれの対象に現れた事実を見て構造をとらえ、判断し行動していることを認めることができた。この判断を

導いた看護を実現するという認識には、健康観・生活観・人間観・自然観に基づく看護についての一般的な像を抽象的段階に据えて、現象像とその表象像を構成する、看護実践を導く立体像であることを認めることができた。

6. 考 察

F. ナイチンゲールは、カイゼルスウェルト学園の見学から病院監督までの3年に満たない期間に、なぜ看護技術の立体像を形成し得たのか、看護技術論は彼女にとってどのような役割を果たしたのかを考察する。

F. ナイチンゲールは、間接的な看護体験では、神を抽象像に位置づけ、事象の立体的な構造を把握し、人間を対象とする技術の表象像を形成した。初めての直接的な看護体験では、看護についての一般的な像を抽象像に位置づけ、看護技術の立体像を描いて実践に臨み、意識的に適用して看護の論理を抜き出し、表象像を得た。この看護の論理は、看護を知らない貴婦人たちを動かす普遍性を持ち、そのように看護の論理を自在に操る彼女には、「看護の論理」は「実践に適用するために」あるという明瞭な目的意識が認められる。つまりF. ナイチンゲールは看護実践において、事象から客観的法則性を抽出し、それを意識的に適用していたことが明らかとなった。それでは、彼女は看護技術論を認識していたのだろうか。彼女は実践から引き出した看護の論理を、「看護の論理」は「実践に適用するために」あるという明瞭な目的意識に位置づけ、認識していたと前述した。このことは、看護についての一般的な像が実践への適用という目的意識を備えた抽象像として描かれていたことを意味するものである。これは看護一般とその実現を目的に据えた看護技術の立体像の認識であり、つまりF. ナイチンゲールは看護技術論を把握していたことの証しであると考えられる。カイゼルスウェルト学園では、彼女自身の実践活動はなかったが、フリードナー牧師たちの実践から、彼等の認識と表現の連関をとらえ、論理を抜き出していた。この論理を抜き出し得たのは、人間が対象を認識するには、観念的追体験によって完全なる神の御意志、つまり神の定める法則を求め実践することであるという、抽象像を描いていたからである。このことから、F. ナイチンゲールは人間を対象とする技術を立体像として認識していたことが明らかとなった。これらの認識活動を一貫して支えた頭脳は、時を遡り、その生活過程において発達したことが推測される。そこで彼女の思考過程の特徴を求め、文献を調べた結果、青年期の頃の彼女の友人にあてた手紙にその特徴が明瞭に現されている。

た。

「このままでは、リネン類とガラス食器に埋もれてしまいそうです。もちろん家事は嫌いではありません。教育程度の総じて高い、それでいて活動領域の狭い現代にあっては、少なくとも家事は理論を実地に活用する、よい機会ともいえます。でも使い方の見当さえつかないような、実用より装飾用にふさわしい、凝った台所用品のリストを作りながら、筆者は自問せずにはいられないのです。もののよくわかっている人たちは、本当にこうしたものを欲しているのだろうか？こんなにたくさんの陶器、リネン、ガラス器が、人類の進歩に果たして必要なのだろうか？仕事をあてがうために願望の対象を発明するなんて、これがまっとうな経済学といえるだろうか？現代においては、消費される労力のすべてが再生産の原動力になるべきではないだろうか？まあ、こういったたぐいの数々の疑問です。」⁴⁾

この当時、既に彼女は「理論を実地に活用」することを認め、「人類の進歩」に照らして所蔵品の存在の意味を問い、この現実にも認めた事実を、「まっとうな経済学」に照らし、「消費される労力のすべてが再生産の原動力になるべきである」という経済論理をつかんでいた。すなわち自分の体験や現実世界の事実を事象としてとらえ、一般論に照らして認識しようとする、科学的な思考過程が認められた。この認識活動が家事労働の中で行われていたという事実から、彼女の日常的な認識活動の特徴として注目することができる。つまり、彼女の看護体験以前の認識の特徴とは、科学的な思考過程と、日常的に人間の存在や人類にとっての学問の意味を問うといった、抽象度の高い抽象像を描いていたことである。この認識活動が、自己の体験から看護の一般的な像を自力で形成させ、看護技術論をも形成させ得たと考えられる。

F. ナイチンゲールは病院監督に就任し、病院運営が軌道にのることと逆行して彼女の病院への関心が薄れつつあった。その一方で英国の社会情勢は急転した。『第3回季刊報告書』が提出される前に、英・仏軍のロシアへの侵攻がはじまり、最終季刊報告が提出された頃には、英軍の医療体制の不備が英国陸軍兵士の惨状を招いていると次々に報道され、非難が政府に集中した。この時、彼女はある貴婦人からの支援の申し出を受け、自ら監督官として看護婦団を編成し、現地に赴こうと準備を進めた。病院監督を辞任するために、友人であるリズ・ハーバートに貴婦人委員会への根回しを依頼する一方で、彼女の夫である戦時大臣シドニー・ハーバートに計画を打ち明ける手紙を出した。ところがその手紙とは入れ違いに、彼から看護婦団を率い現地に赴くことを正式要請す

る手紙が届いた。F. ナイチンゲールは1週間弱の間に、看護婦40人を採用し、全員の旅行の準備をととのえ、すべての仕事を終わらせスクタリに向かった。スクタリでのF. ナイチンゲールは、看護を実現するために、陸軍上層部との駆け引きと、物資の調達、病院環境の衛生改革、兵士を含む看護者として働く人々の看護管理を行った。様々な事情がからみ、複雑で巨大な規模の実践であったが、一つ一つを詳しくみると、病院監督の時になされた実践と論理的には共通していた。このことから、スクタリでの実践を導いたのは、病院監督として看護実践を体験したときに形成された像であり、この像は看護技術論を適用した看護実践が形成させたと考えられる。さらに遡ると、病院監督の実践に彼女を導いたのは、看護の一般的な像を形成させたカイゼルスウェルト学園での看護研修であり、その看護研修へと彼女を駆り立てたのは、それに先立つカイゼルスウェルト学園の見学であった。この認識と実践の連続性が、彼女の看護実践を可能にしたと考える。

スクタリから帰国した彼女は執筆活動に取り組み、英国陸軍と陸軍が駐屯するインドの衛生問題について、膨大な調査報告とその改革の提言を行なった。その一方で、看護一般論を、最初はすべての女性に向けて⁵⁾、次いで看護婦に向けて⁶⁾、そしてその翌年には労働者に向けて⁷⁾出版した。その背景には彼女の過去のすべての看護実践体験が存在し、その実践の認識が、彼女の認識に英国陸軍の衛生改革、そして一般国民の健康の実現という人生最大の目標を抱かせ、この目標を抽象像に据えた立体像が実現可能なこととして認識され、それが著作として表現されたのだと考える。

以上より、本研究で明らかになったF. ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程について述べる。

1) 見学体験では、看護についての一般的な像の形成は認められなかった。この時、人間とは完全なる神の定める法則を求め実践する存在ととらえ、この抽象像に照らして見学した看護実践の意味を探り、人間を対象とする実践に共通する表象像を描き、技術を立体像として認識していた。

2) 病院監督の時には看護についての一般的な像を形成し、実践を展開した。

3) 直接的な看護体験では、看護の一般的な像を意識的に適用して看護技術の表象像を得て、その認識を、次の実践に適用していた。このことから、この時すでに看護技術の立体像を形成しており、意識的に実践に適用するという看護技術論の形成をも認められた。

4) 看護技術の表象像(看護の論理)として、「特殊な

生活過程をみてとり患者に働きかける」「身体と心と生活を同時に支える」「相手の認識の形成・発展を促す」「精神の交流をはかる」「患者の関心を人間として生きることに実現に向ける」「患者にとっての医療と看護の役割の実現」「生活環境の整備とその継続的管理」が引き出された。

5) この段階の看護技術論が、スクタリでの実践を導き、彼女を実践家として飛躍的に発展させた。この体験を経て、後に『看護覚え書』に提示された、看護一般に結実する認識が形成された。

7. 結 論

抽象像に導かれた実践が、技術の立体像の形成を促した。この立体像を看護実践に意識的に適用するという認識が、看護技術の立体像の形成と同時進行で、次の看護実践への適用を促した。この認識と実践の連続性のうちに、看護技術論を基礎とする看護者としての発展の構造が明らかとなった。

8. おわりに

本研究は以上のように、看護一般を明らかにしたF. ナイチンゲールが、看護職としての初期に、看護技術論を形成していたことを明らかにした。今後は、現代における看護者の看護技術論の形成の実態を明らかにし、看護実践を向上する要因との関係を究明することと、教育実践の場で、この認識活動を意識的に適用することで、学習者の認識にどのような変化をもたらすことができるのかを明らかにすることが課題である。

本研究をまとめるにあたりご指導いただいた元千葉大学看護学部薄井坦子教授、千葉大学看護学部石川稔生教授、杉森みどり教授に心から感謝する。

本論文は博士学位論文(看護学、千葉大学)の一部である。

〈引用文献〉

- 1) 薄井坦子：科学的看護論第3版，日本看護協会出版会，pp59，1997.
- 2) 武谷三男：弁証法の諸問題，勁草書房，pp131，1968.
- 3) Nightingale, F., 湯楨ます他訳：思索への思唆(抄)，ナイチンゲール著作集 第三巻，現代社，pp141-241，1977.
- 4) Cook, E. T., 中村妙子訳：ナイティンゲール(その生涯と思想)，時空出版，pp65，1993.

- 5) Nightingale, F.: NOTES ON NURSING, London, Harrison, 1859.
- 6) Nightingale, F.: NOTES ON NURSING The Second Version, London, Harrison, 1860.
- 7) Nightingale, F.: NOTES ON NURSING, The Third Version, London, Harrison, 1861.

〈参考文献〉

- 1) 庄司和晃：仮説実験授業と認識の理論，季節社，1976.
- 2) 三浦つとむ：認識と言語の理論第一部，勁草書房，1967.
- 3) Woodham-Smith, C., 武山満知子他訳：フロレンス・ナイチンゲールの生涯（上），現代社，1981.

THE FORMING PROCESS OF THE IDEA OF NURSING TECHNOLOGY IN FLORENCE NIGHTINGALE

TOSHIE YAMAMOTO

School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

nursing technology, nursing paradigm, Florence Nightingale

The purpose of this study was to clarify the forming process of the idea of nursing technology in Florence Nightingale by analyzing her own writings. One was 'The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev. Pastor Fliedner, embracing the Support and Care of a Hospital, Infant and Industrial Schools, and a Female Penitentiary' (1851). It was written when she observed the nursing practices at first time. Another was 'Superintendent's Quarterly Reports to the Governors of Nursing Home at Harley Street, 1853-4'. It was written when she had the first experience of nursing.

Florence Nightingale didn't imagine a nursing paradigm by the observation of nursing at Kaiserswerth. However, having the idea of "God", she retroducted the logic from the nursing practice and made sense of what the technique for human beings was. At Harley Street, she had improved the nursing home as the superintendent. Simultaneously, having the point of view which was her nursing paradigm, she retroducted the logic of nursing. Therefore she had succeeded to form the cognition for professional nursing and intentionally perform nursing led by it. That showed she had the idea of nursing technology at this time.

These findings suggest that there was the reciprocal process between forming her cognition for professional nursing and performing intentional nursing led by it. It shows the structure for acquiring the ability of expert nurse based on the idea of nursing technology.